北海道旭川聾学校（令和８年１１月１２日作成）

北海道新聞朝刊道北版
（令和8年11月12日掲載）
著作物利用許諾番号：D2611-2711-00032114

第３種郵便物認可



旭川聾学校の児童らと手話を通じて交流するボランティア

教員支援のボランティア制度

「旭聾サポーターズ」好評

登録者40人 学校行事の力に

日本最北のろう学校として知られる北海道旭川聾学校が始めた教員支援ボランティア制度「旭聾サポーターズ」が好評だ。制度開始から1年で登録者数は当初の想定の1・5倍となり、道北各地の手話サークル会員や手話通訳士らが活動に協力している。教職員の人手不足を補う一助となっているほか、学校側は今後、地域に学校への理解を広げる機会にもしたい考えだ。

制度は昨年7月、地学協働の推進を目的に導入した。これまでも地元の大学や社会福祉協議会を通じてボランティアを募っていたが、十分な人数が集まらないこともあった。このため、学校が登録者に直接連絡できる仕組みを設け、日時や活動内容に応じて協力を呼びかけられるようにし、人手を確保しやすくした。

活動には手話体験や聴覚障害に関する講座の受講が必要。登録者は地元の手話サークルに所属する大学生や社会人のほか、同校の元職員、卒業生ら想定を超える約40人に上る。

登録者の増加の背景には、2016年施行の「旭川市手話言語に関する基本条例」の存在もあるとみられる。北海道ろうあ連盟によると、26年6月16日時点で同様の条例を導入している自治体は道と43市町村あり、旭川市は道内で9番目と比較的早かった。条例施行から10年がたち、手話や聴覚障害への関心が地域に広がり、担い手の確保にもつながっているとみられる。

登録者はさまざまな場面で力を発揮している。手話を交えてリフトの乗り方を教えるスキー学習の補助や、学校祭で使う道具の搬入・搬出、乳児の保護者が育児講習を受ける間の見守りなど、活動は多岐にわたる。

10月上旬に開かれたボランティアと児童らとの交流会に参加した旭川市の会社員関沢佳恵さん（57）は「手話通訳士を目指していて、ボランティアは勉強にもなるし、地域貢献にもつなげられるら」と話す。同校担当者は「教職員の数も十分にいるわけではなく、サポーターズの存在は心強い」と歓迎する。

制度にはほかの特別支援学校からも問い合わせが寄せられている。同校によると、鷹栖町や青森県の学校でも同様の取り組みが始まったという。門真義弘校長は「地域の理解と協力が制度を支えている。今後も学校と地域のつながりを深め、教育活動の充実につなげたい」と話している。

（山中悠介）